



何を借り、何を貸すのか

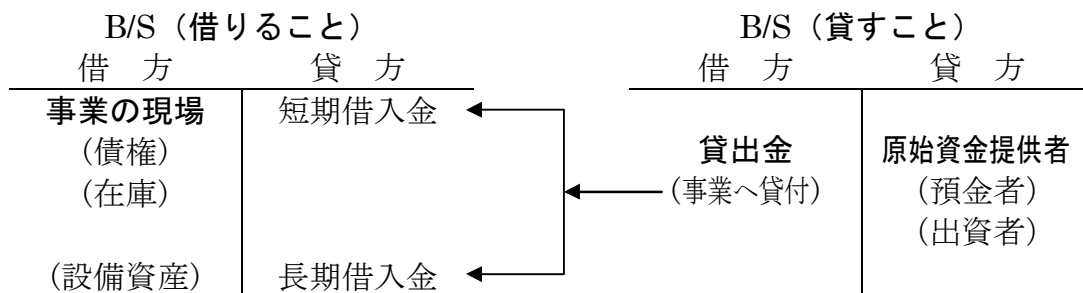
(2月のごあいさつ)

平成26年2月2日(日)

1月31日は旧暦の元旦で、中国の春節(正月)です。沖縄の街には春節の風景がまだ少し残り、空は晴れて暖かく春の到来を思わせました。

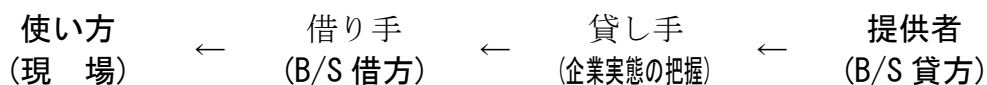
情報技術は、既存の**世界の破壊**を行っているようである。情報技術進化のスピードは**指数関数的**である。音楽を聴くスタイル、紙情報とNetの利用、アマゾンに見る購買様式、働くスタイル、仕事内容の変化など、**人間と機械(情報技術)との競争**は、5年もすれば世の中の様相を大きく変えそうである。

本日のごあいさつは、資金調達の話だが、借り手は、果たして**何を借りるのか**。それは金銭ではなく、**事業の必要性**である。貸し手は何を貸すのか。**原始資金提供者**から託された金銭を超えて、借り手の事業へ貸すのである。借り手が**事業の現場**で**資金**を活用している状況は、**バランスシート**を見ればよく解る。



借り手が、借入れた資金は、単なる負債(長、短期借入金)に止まることなく、**動産(棚卸資産や売上債権等)や設備**の取得に投ぜられる。即ち、借り手は、**実質的に動産や設備**を借りたのである。生産、営業活動を行うために、**事業の現場**で**借り、現場の事業活動**によって**借入金の返済**を行う。また、貸し手は、**動産や設備、即ち事業に貸し、貸出金及び利息の回収**は**事業の現場**からしか行えない。

借り手の動産や設備の活用の管理、**経営状態の把握**が貸し手の成長の原則である。これが**中小企業取引**であり、**百聞は一見に如かず**、貸し手は、自己と借り手のために**企業現場**へ行くことである。



お金の行き先は、借り手の現場である。借り手は勿論、貸し手も**企業現場**の実態の把握と改善が**返済と回収**のポイントである。